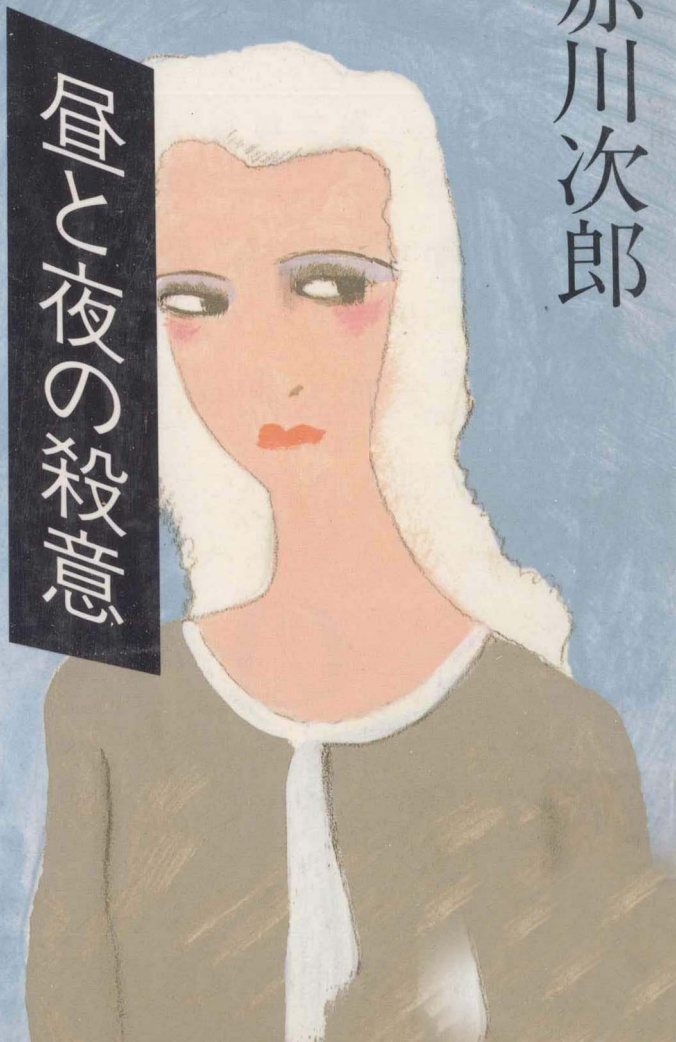


赤川次郎

昼と夜の殺意



徳間文庫



ひる よる さつ い
昼と夜の殺意

© Jirô Akagawa 1985

1985年10月15日 初刷
1995年4月25日 31刷

著者 赤川次郎 あか がわ じ ろう

発行者 徳間康快 とく ま かつ

東京都港区東新橋一丁目一〇五

発行所 株式会社徳間書店

電話(〇三)三五七三・〇一一(大代)
振替 〇〇一四〇一〇一四四三九二

印刷

製本

凸版印刷株式会社

〈編集担当 本間 肇〉

ISBN4-19-567938-9 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

昼と夜の殺意

目次

確実な鼓動	5
二つの星	25
静かな叫び	49
秘密	71
約束	93
うわさ	113
出会い	137
オーディシヨン	159
孤独の詩 ^{うた}	180
容疑	198

白い時間 215

見知らぬ男の影 232

ネガの顔 254

幸福な破局 281

その日…… 308

また演じたい赤川作品 紺野美沙子 345

確実な鼓動

1

舞台裏というのは、覗くものではない。その舞台が華やかであればあるほど、覗いてはならないのだ。

それは比喩でも何でもないので。本当に、舞台の裏や、袖のごみごみしていることといたたら！——ただでさえ苛々している出演者の神経を、そのごたごたがますます逆なでする。

「ちよつと、静かにしてよ！」

突然、ガラスを釘で引っかくような声を投げつけられて、韻子は、反射的に、「すみません」

と言っていた。

それから、自分が何をやっていたのかしら、と考えた。——ああ、これか。

膝に、立てるようにして持っていたヴァイオリンの弦を、左手の指が、無意識に叩いていたのだ。弾いているわけではないから、微かな音をたてているだけなのだが、それでも、順番の前に、緊張し切っているコンクールの参加者には、耳障りなのだろう。

韻子は、ヴァイオリンを、膝の上に横にして置いた。

韻子を怒鳴りつけた娘は、軽く目をつぶって頭を振ると、

「ごめんなさい」

と静かな声になって言った。「だめなの。自信ないからピリピリして……。あなた、落ち着いてるわね」

「そうでもないけど……割合に慣れてるの」

と韻子は、微笑んだ。

「私、武田百合。あなたは？」

「水城韻子」

相手の娘は目をちよっと見開いて、

「水城？　じゃ、あの“水城？”

と訊いた。

それから、あわてて、

「ほら、水城姉妹って……。今、ピアノ弾いてるのが——」

「姉よ、私の」

「そうなの。落ち着いてるわけだ」

武田百合という少女は、まじまじと韻子を眺めた。韻子は、目をそらして、舞台の方へと顔を向けた。

長く垂れた幕の隙間から、姉、澄音の後姿が見えている。いつものように、左右へ体を波打つように動かしながら、スタインウェイのピアノから、音楽を叩き出していく。

袖には、順番を待つ二人の奏者が待機していることになっていた。今は、澄音の次に演奏する、ピアノ部門の最終奏者、武田百合と、続いて本選の始まるヴァイオリン部門の第一奏者、韻子の二人が、折りたたみ式の椅子に、向い合って座っているのだった。

武田百合の方は、淡いピンクのドレスで、いかにも高価そうなレースがふんだんに使ったが、韻子は、白のあっさりしたドレスだった。姉の、燃えるような赤のドレスとは対照的だ。

「——あなたのお姉さん、凄いわねえ」

と、武田百合が言った。「あがるってことないんでしょ、あなた方は」

「そうね」

韻子は長い髪を軽くかき上げて、肩をすくめた。十九歳の娘にしては、大人びた仕草だった。水城澄音の演奏が終った。

拍手がホールに溢^{あふ}れんばかりだった。それまでの演奏者に比べ、一段と拍手の音が大きい。「——いやだな、私があんなに巧^{うま}い人の後なんて」

と、武田百合は顔をしかめた。

「しっかりね」

と韻子は言った。

「ありがとう」

武田百合は立ち上って、名前を呼ばれるのを待った。

澄音が戻って来る。別に、頬を紅潮させるでもなく、至って平静な様子だった。

入れ違いに、武田百合が、名前を呼ばれてステージに進み出て行った。

袖に戻って来た姉へ、

「ご苦勞様」

と、韻子は声をかけた。

「何だ、次なの？」

澄音は足を止めて、初めて妹に気付いた、という様子で言った。

「うん。くじでトップになったの」

「そう。何もトップにならないよりはいいかもしれないわ」

澄音はそう言って、軽く笑った。

水城澄音、二十三歳。ちょっとふつくらした顔立ちで幼く見える妹とは対照的に、少し細面の、切れ長の目が、大人の女を感じさせた。スラリとしてはいるが、そう長身ではない。しかし、どこにいても、人の目をひきつける雰囲気を備えていた。

「お母さんは？」

と澄音は歩きかけて訊いた。

「もう来てると思うけど」

「でしようね。——娘の晴れ姿を見るのが生きがいなんだから。まあ、頑張って」

「うん」

韻子は、澄音が歩き出すのを見送った。澄音は、ちょうど武田百合が奏き始めたのを聞いて振り返ると、

「ひどい音」

と呟いた。

姉が行ってしまうと、韻子はまたヴァイオリンを膝に立てて持った。——左手の、親指を除く四本の指が、弦の上で軽やかに踊った。

姉が出て行ったので、入れかわりにヴァイオリンの次の奏者がやって来て、向いの空いた椅子に座った。初めて見る顔だった。韻子と同じくらいの年齢の娘で、どうやらコンクールというものはこれが初めてらしく、顔は青ざめて、ほとんど引きつらんばかりである。

韻子は、何だかおかしいような気分で、それを眺めていた。――あがった、という記憶は、韻子にはない。姉の澄音も、もちろんそうだろう。

子供の頃から、二人は舞台の上で遊んでいたようなものだった。

「メトロノームを見なさい」

と、母はいつも言ったものだ。「あなたたちも、いつもああいう風でなくちゃだめよ。自分の心臓を、常に冷静にしておかなくちゃね」

2

子供の頃から数えて、ステージに立つのはこれで何回目だろう、と韻子は思った。

最初のステージなどは記憶にない。それほど昔のことだった。

たぶん、四歳になるかどうか、という頃であつたろう。

演奏家になるには、実力を養うのはもちろんだが、その実力を、ステージで発揮できなくては意味がない。だから、子供には、できるだけひんばんに、舞台上に上らせる。

これが母の主義だった。――姉の澄音は、生来、人の前に出るのが好きな少女だったから、喜んでステージに立つ。しかし、韻子の方は、姉と対照的に、一人でいるのが好きだった。

それだからこそ、慣れなくちゃ、と母は口ぐせのように言っていた。澄音も、面白がって妹

を引張り出した……。

もちろん、今は韻子も、舞台へ出ることで別に緊張はしない。それが却^{かえ}って、物足りないくらいである。

新鮮な感動も、気分の高揚も、何もない。——一体何が楽しくてこんなことをやってるんだろう、とときどき、韻子は思うことがあった。

——拍手の音で、韻子はふと我に返った。

武田百合が戻って来る。

「ああ、ひどい」

額は玉のような汗だ。

「ご苦労さま」

「三回もミス・タッチしちゃった。もうおしまいだわ」

「大丈夫よ」

「あなたのお姉さんの後じゃ目立つしね」

と、武田百合は、気を取り直すように笑って、「さて、ともかく終わった、と」

「待ってるんでしょ？」

「発表？ 私、帰るわ。どうせ分ってるもの。——でも、母がねえ」

「お母さんがみえてるの？」

「いい加減、自分の娘に才能がないことを分つてくれないと思ふんだけど、これでまたお目玉くらって、特訓、特訓よ」

二人は顔を見合せて笑った。お互い似た者同士、といった苦笑だ。

「じゃ、またその内に」

と武田百合は手を振って、袖から楽屋への階段を降りて行った。

——次のヴァイオリン部門が始まるまで、少し間がある。

韻子は、向いに座った次の奏者の少女を眺めていた。緊張のせいで、ひっきりなしに唇をなめたり、上を見たり下を見たり、忙しい。

膝が、それと分るほど震えている。

こういう人は、演奏家には向いていないだろう、と韻子は思った。教育者にはいいかもしれないけど。

足音に顔を上げると、武田百合が戻って来たのだった。

「どうしたの？」

「ねえ、あなたに会いたいわって人が……」

「私に？」

「そう。栗崎さんって人よ」

韻子は思わず腰を浮かした。

「知ってる人？」

と、武田百合が言った。

「ええ……」

韻子は立ち上ったものの、その場から動けなかった。いつ、名前を呼ばれて出て行かなくてはならないか分らないのだ。

「——何か言つときましようか」

武田百合が言った。

「いえ、行くわ」

韻子は思い切つて、ヴァイオリンと弓を椅子に置くと、階段を駆け降りた。薄暗い廊下に、人影があった。

「——栗崎さん」

と、韻子が呼ぶと、その青年が振り返る。

「やあ、悪いね」

と、栗崎が言った。

「いいの。でもどうしたの？　びっくりしたわ」

「邪魔するつもりじゃなかったんだ」

「次が出番なの」

「うん、知ってる」

背広にネクタイという、ごく当り前のビジネスマンスタイルだが、どこことなく、坊っちゃんらしい雰囲気飄^{ひょう}々^{たん}としている。

「何か——ご用？」

韻子は、軽く上目づかいに、栗崎を見ながら訊いた。

「これから出張なんだ。急にね」

「まあ、大変ね」

「だから、君の演奏を聞いて行けないんだ……」

「そんなこといいのよ」

韻子は微笑んだ。「どこへ行くの？」

「北海道だ。一週間で帰る」

「そう。——じゃ、急ぐんでしょ？」

「車、待たせてある」

二人は、何となく黙った。——どちらも急いでいて、時間がなかった。しかし、言葉が出て来ないのだ。

武田百合が駆け降りて来た。

「ねえ！ 呼んでるわよ！」

韻子がハッと顔を上げた。

「行かなきゃ」

「頑張って」

と、栗崎が言った。

「ありがとう」

韻子は、武田百合の方へ、肯^{うなず}いて見せて、階段の方へ駆け出した。

「韻子さん」

と、栗崎が呼んだ。

「え？」

階段へ足をかけたまま、韻子が振り返る。

栗崎がいきなり走り寄ると、韻子を抱きしめた。韻子は、何も考える間もなく、彼の唇で、唇を塞^{ふさ}がれていた。

突風のように、それは韻子を圧倒した。——栗崎が、韻子から離れる。

「それじゃ——」

栗崎は廊下を駆けて行った。韻子が呆然とそれを見送る。

「早く出て！」

と、武田百合が言った。